J.S.バッハ：《無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ》

J.S.バッハ（1685-1750）の《無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ》は、3 曲ずつのソナタとパルティータで構成されており、1720 年の日付がある清書譜が残されているため、おそらくそれ以前、バッハの器楽曲の名品が生まれたケーテン宮廷楽長時代（1717-23）前半の所産と考えられている。

無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ 第 2 番

パルティータ第 2 番の演奏機会が際立って多いのは、ひとえに第 5 楽章に置かれた「シャコンヌ」の魅力による。第 4 楽章までは、伝統的舞曲の定型にそって進み、全体のボリュームとしてはこれらが前半に相当する。そして後半を占めるのが、3 拍子系の古い舞曲を出自とするシャコンヌである。シャコンヌの圧倒的な規模、美しさ、崇高さは、《無伴奏ヴァイオリン》曲集の真価を象徴しているといっても過言ではない。冒頭で呈示される 8 小節の主題が、4 小節ずつ前半・後半に分かれて同じ和声進行を繰り返し、さらにその 8 小節の主題が 30 回にわたって変奏される。舞曲という枠組みをはるかに超えた〝音楽による建築物〟ともいえる世界が、一挺のヴァイオリンによって形づくられていく。

無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ 第 3 番

ソナタ第 3 番のフーガの序奏となる第 1 楽章アダージョは、付点リズムによる神秘的な重音でゆっくりと始まる。第 2 楽章のフーガの主題には、聖霊降臨祭の古いコラール《来たれ、聖霊よ、主なる神よ》の旋律が使われている。この 354 小節に及ぶフーガは、バッハが遺したフーガのなかでも最長。第 3 楽章ラルゴは短いが、優雅な旋律を歌う。第 4 楽章は、軽快に駆けまわるアレグロ・アッサイ。

無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ 第 3 番

パルティータ第 3 番には軽快で明るい舞曲が並ぶ。第 1 楽章プレリュードは華やかに始まり、第 2 楽章ルールでは抒情的な旋律が美しく歌う。第 3 楽章ガヴォット・アン・ロンドーは単独で奏される機会も多い。第 4 楽章は親しみやすい旋律の第 1 メヌエット、第 5 楽章には柔らかな雰囲気の第 2 メヌエットが続く。第 6 楽章は軽やかなブーレ、最後の第 7 楽章には快速なテンポのジーグが置かれている。